

(学年) 4年	(日にち) 6月4, 5, 6日
(教科・単元名) 国語 詩「春のうた」 作者 草野心平(3時間扱い)	
(実践) 言葉の意味や情景を想像しながら詩を読む。	
【授業の流れと児童の反応】	
1. 詩を10回以上音読する。…自分で4回。全体で読む。(教師の読みの後に連れ読み。1行ずつ教師と交代で)。自分で読む。ペアで読む。	
2. 一字読解をする。ノートに①から⑦まで番号をふらせ、教師から出される問題の答えをノートに書いていく。①題名は②季節は③作者は④話者は⑤かえるの鳴き声は⑥「ケルルン クック」といったのは⑦何連に分かれているか ここまでは、テンポ良く進める。④と⑦で問題の意味が分からない子がいるが、確認して考えを書かせる。話者…誰の目から書かれているか。何連…まとまりでわかれているところ	
3. 【問1】かえるが最初に見たものは(太陽の光)	
4. 【問2】かえるが見たものすべてを書きましょう。(太陽の光、小川の流れ、いぬのふぐり、雲、空) ・児童から出た意見では、太陽、光、池の水、川の水、水溜り、湖、田んぼの水、風、いぬのふぐり、雲、空。 ペアで話し合いをした後、全体で意見を出させた。意見が出尽くした後に、確認をしていった。太陽は、太陽そのものを見ることはないので削られた。風は、見たものでなく感じたもの。いぬのふぐりについては、どんな植物か分からない児童が多かったので、写真を提示した。「みず」から受けるイメージは、様々で一つに絞る事はできなかった。雲については、「蜘蛛」と考えた人がいないか確認したところ、ペアで話し合ったときは、数人が書いてあった。春の様子を詩にしたのだから空に浮かんでいる大きな雲であると理解したようだ。雲は、「うごいてくる」という表現からとてつもなく大きな雲や入道雲をイメージした児童がいた。空については、意見が分かれたが雲を見ている時に空も見えていることになった。	
5. 【問3】かえるは、どこからみているか。かえるの視点(かえるが見ている位置)を考えさせる。絵で表し考えさせる。 ・児童から出た意見は、①土から出たところ。②地上。③連によって視点が変わる。①と②で意見が分かれた。①に賛成の児童は、1連は、土から顔を出したばかりだからこそ、「まぶしいな」と感じられると最初の表現にこだわって考えた。②に賛成の児童は、①だと水やいぬのふぐりが見えないので、地上にでていると考えた。また、前置きに「地上にでてきて」と書いてあるという理由を述べた児童もいた。それらの話を受け、③だと考えた児童が多くなった。1連では、土から顔を出したばかりだが、だんだんと地上に上がってきて2連では、体が全部出てきた状態で水を見ているのではないかとかんがえた児童が増えた。一つの意見にならなかったが、それぞれの理由付けをもって終わった。	
6. 学習したことをまとめる。	
7. 自分の読みが音読に表せるようにする。暗唱。	
(学習のふりかえり)	
○教師からの発問で授業を進めたが、意欲的に取り組めた。発問で児童の答えが分かれば、友達と話し合う中で自分の考えをはっきりさせていくことができたように思う。話者が見たもの、視点を考えさせることにより言葉にこだわり、その言葉からイメージを広げて読むことができた。「春のうた」の情景を一人ひとりがイメージできたと言える。学習したことを評論文として書かせたが、自分の読みのまとめができたように思う。最後に音読として表現読みをしたが、「ほっ」やかえるの鳴き声など工夫されていた。楽しんで取り組むことができた。	

